



只見短歌会

十二月詠草

大塚栄一

指導

馬場 八智

間もなく根雪とならむこの頃はあれもこれもただ落ちつかず

関谷登美子

気配りてゐるつもりでも離れば煮豆再び噴きこぼれをり

新国由紀子

クリスマスケーキと御節蕎麦などと恒例なりし料理の届く

目黒 富子

子は早く育てばいいと思へども孫等はなるべくゆつくりがいい

渡部ヨリ子

巻くわらぬ白菜なれど冬の卓に緑の野菜は彩りを添ふ

新国 洋子

消息の遠のきし友ら思ひゐる窓辺ひすがら淡雪の降る

(出詠順)



只見俳句会

一月例会

目黒十一

指導

幸 生

輝かほの少国民や松根掘る

身構えて我が目を探る寒鴉

信

昔々吹雪の夜や囲炉裏端

冬晴れの庭に一輪薔薇蕾

都

冬至の日確かと沈むや日和かな

暖冬や雨滴やまずして軒しずく

味代子

小春日や居間の日ざし猫眠る

冬うらら妊婦の両手子とつなぐ

弘 子

片すみに父在りし日の火鉢かな

奇跡をば病む友に欲し寒の雨

礼

綿虫や「至急」と赤き回覧板

一步一步雨の路面を年忘

一 穂

押し来るや雪に塗るる排土板

災の字を幸と入れ替え去年今年

修 一

白銀の雪道包む夕陽かな

夫婦して労わりあつてお屠蘇かな

吉 児

息災の年でありたし鳥総松

老軀日々床暖たより風邪怖し

恒 夫

初夢を見るには見てもなにぬねの

雪晴や輝いているタイヤ痕

